

窪田順さんとは、2000年に兵庫県立近代美術館で開催された「アート・ナウ2000:『なごみ』のヒント」でお仕事をご一緒させていただいた。王子動物園の向かいにあった近代美術館が閉館する前年のことだ。それ以前から、窪田さんの作品は大阪の画廊や六甲アイランドの野外展などで拝見していたし、それ以後も各地の展覧会で作品を拝見している。それだけでなく、他の美術展の会場などでもお会いし、そのたびに言葉を交わしてきた。しかし、何といっても私にとっては、2000年の展覧会のこと印象深い。

学芸員が美術家に対して「ご一緒させていただいた」とはおこがましい。展覧会のお仕事をお願いしたのだ。だが、展示期間中に何度も会場に足を運んでいただき、一緒に作品のメンテナンス作業をすることも多かった。窪田さんといえばまずそのことが思い出されるので、やはり「ご一緒させていただいた」という表現が私にはしっくりくる。この「一緒に」何かを作り上げた気分させてくれるところが、窪田さんの作品の魅力であり、窪田さんご自身のお人柄の為せる業なのだと思う。

2000年当時、私は兵庫県立近代美術館の学芸員だった。勤めはじめて5年、まだ若手といえる年代だった。50代半ば以上の現代美術愛好家のなかには、「アート・ナウ」という展覧会の名前に特別な感慨を抱く人も多だろう。関西在住の現代美術家を紹介する展覧会として1975年から1988年まで毎年開催されてきたこの展覧会は、最新の美術動向を紹介する場として注目を集めてきた。森村泰昌さんや榎忠さんや北山善夫さんなど、現代日本のアートシーンを代表する美術家たちも、若き日にこの展覧会に出品している。

しかし、「展覧会委員」の推薦による美術家を紹介する総花的な展覧会だった「アート・ナウ」は、1988年でいったん終了した。その後、1992年から作家数を絞ったテーマ展として隔年開催で再開され、2000年は再開後5回目の展覧会だった。そして、2002年にHAT神戸に移転開館した兵庫県立美術館にこの展覧会が引き継がれることはなかったため、実質的にこれが最後の「アート・ナウ」となった。

私はこの時、それ以前の「アート・ナウ」とはまったく別の展覧会を企画したいと考えていた。現代美術は難しいとはよく言われることである。予備知識を必要とする古い時代の宗教画などと比べて、それが本当に難しいかどうかは微妙なところだが、敷居が高いことは間違いない。いや、地域アートやインスタ映え隆盛の最近の事情を考えると、敷居が高かったと過去形で語るほうが正確かもしれない。その当時、門外漢が現代美術を展示する画廊に足を踏み入れるにはそれなりの勇気が必要だったし、作品はともかく作品の解説はたいへい難解でよく分からなかった。「無題」って何だ？そう感じる人にも楽しめる展覧会にしたかった。ほとんど展覧会実績のない若手の美術家や、現代美術の文脈で展示されたことのない障害のある作り手を含めたのもそのためだった。

そして何より、体験型の作品を中心に展示を構成したことに大きな特徴があった。橘宣行さんによ

る巨大な鋼鉄の野球盤、おっとさんによる木製の衣装の試着コーナー、LOC0さんの紙コップによる糸電話の壮大なインスタレーションなど、来場した友人や家族同士で、あるいはたまたま居合わせた見ず知らずの観客同士で体験し、会話を交わすことをねらった展覧会だった。その目論見はある程度成功し、会場には子どもたちの歓声があふれる日も多かった。地方美術館の小さな予算の展覧会だったが、翌年に『美術手帖』が「ようこそ21世紀ミュージアムへ」という特集(2001年3月号)を組んだ時には、ミュージアムの「あり方自体を外向きに開いていく試み」のひとつとして取り上げられた。

そして、その会場の中心に窪田さんの作品が鎮座していた。水溶性の小さな紙を壁一面に貼りめぐらせ、観客が一枚をはがして備え付けのベンで落書きをしてから水槽に落とす《ACTIVE PAPER-とけるかべ》と、乗り込んでくつろぐことができる約5メートル四方の紙の座布団《ACTIVE PAPER-かみのベッド》は観客の人気を集めた。溶けた紙の繊維は会期中に水槽に沈殿していき、かみの布団はポロポロになった。それ以前にも窪田さんは、水溶性の紙を用いた作品や紙の上に乗る作品を発表していたが、これほど大規模に鑑賞者の体験を導く作品は窪田さんにとっても初めてのことだったのではないかと。そして、その後の窪田さんの創作活動を考えても、この時の観客の歓声は窪田さんの背中を押す役割を果たしたのではないと思う。

窪田さんの作品には、常に楽しい驚きと不思議、作品に能動的に関わる喜びがある。そして、多くの場合その場には作家である窪田さんご自身がおられて、一人で訪れた観客でも臆せず作品を体験できるように導いてくれる。窪田さんの作品を楽しむ私自身の写真が何枚か手元にある。これも窪田さんご自身が撮影して送ってくださったものだ。この包容力とホスピタリティは、窪田さんのお人柄であるとともに、作品そのものの特徴でもある。

窪田さんといえば、ストリート・ギャラリーの活動も忘れられない。1992年に神戸のJR住吉駅にほど近いショーウィンドウで始まったこの試みは、2020年まで続いた。もちろん私はそのすべてを目撃してきたわけではないが、折に触れて展示を楽しみ、扉に吊り下げられた小さなノートに名前を書いて帰ったものだ。展覧会のラインナップを見ると、窪田さんが関西の現代美術シーンにいかに深くコミットし、広大なネットワークを築いてこられたかが分かる。その意味では、「敷居の高い」現代美術のサークルの只中におられたわけだが、路上から気軽に見られるこのギャラリーには、不思議とそのような敷居の高さを感じることはなかった。場所柄か、それとも気さくでポジティブな窪田さんのキャラクターのゆえだろうか。このギャラリーの運営を通じて、窪田さんは長らく関西の現代美術界に伴走してきた。そんな窪田さんは、かつて関西の現代美術の登竜門とも呼ばれた「アート・ナウ」の最後を飾る一風変わった展覧会の幕引き役として、誠に適任だったのだと今になって思う。